

# 私の一文字

経済研究所  
所長

神津 多可思

日本証券アナリスト協会  
専務理事



## 面を上げて「凛」と生きる

会員の方が思いを込めて選んだ一字に、書家の岡西佑奈さんが命を吹き込む「私の一文字」。今月は、神津多可思経済研究所所長にご登場いただきました。

**岡西** 「凛」は「にすい」の部首と「米蔵」と「禾」による「つくり」で、米蔵の近くに氷がある意を示しています。寒々しい様子から転じ、「冴えて、引き締まっている」などの意味で使われるようになりました。最初の一画をしっかりと、最後の一画はそっと抑えるように、その間は人生の物語がつむがれているイメージで筆を進めました。「凛とした生き方」へのお考えを他の記事で拝見しましたが、もう少し詳しく教えてください。

**神津** この字は音の響きが良いですね。光が差す方向に面を上げて向かうイメージを私は抱いています。何事も悲観的になると、良い結果は生まれません。そういうときには一度足を止め、姿勢を起こしていくことが必要だと思うのですが、この字からはまさに「りん」と音が鳴るように感じます。面を上げて生きていくのはなかなか大変ですが、そうありたいと思っています。

**岡西** 字に“音”を感じられたとは、豊かな感性をお持ちですね。現在のお仕事は、どのようなことに取り組んでいらっしゃるのでしょうか。

**神津** 資産運用についてアドバイスをするアナリストの資格試験や情報提供などを行っているのが当協会です。30年ほど前は資産拡大を銀行の利子に頼っていた人も多いと思

いますが、時代も変わりました。超高齢化社会の今、生きていくための資産について、考える重要性が増してきています。

**岡西** 私も、きちんと考えていかななくてはと感じているところです。金融商品も、選ぶことの難しさは常々感じるところですが、選択肢は多いほど悩ましい気もします。神津さんもさまざまな選択をされてきたと思いますが、その時々はどう考えられてきたのでしょうか。

**神津** 何かの岐路に直面したときを思い起こすと、意外に深く考えて判断してきたわけではありません。ただ、やらなかったことによる後悔がないように、というのは選択基準の一つだったかもしれません。正しかったかどうかということより、自分が嫌だと思うことはしないように、とっていました。

**岡西** そこをぶらさずに進まれてきたのですね。経済同友会では経済研究所の所長を務められていますが、その活動についてお聞かせください。

**神津** 経済同友会は経営現場での実践や経験から社会に発信することが多いですが、そこに何かの理屈付けがあるほど説得力が増すと思っています。逆に理屈だけで意図がうまく伝わらないと、受け止める人たちが混乱する可能性もあります。私はビジネスにかかわりつつ大学でも教えてきましたので、多様な立場の人たちに、経済同友会からの発信がより分かりやすく、インパクトある形で伝わるように、実務とアカデミックのブリッジになるような活動を、今後もしていきたいと思っています。



書家  
岡西 佑奈

1985年3月生まれ。23歳で書家として活動を始め、国内外受賞歴多数。